

[東京大学イタリア語教材]

● ぼくのかんがえたさいきょうのびあっつあ ●

Coordinamento per la didattica della lingua italiana, Università di Tokyo

東京大学イタリア語教材編集委員会 編



Casa Editrice dell'Università di Tokyo

東京大学出版会

2011 年度入学東京大学文科Ⅲ類 6 組作成

● ぼくのかんがえたさいきょうのびあっつぁ ●

-Piazza で学ぶ全てのイタリア語選択者に捧げる-

## *Indice*

---

<i>Ai giovani d'Italia.....</i>	<i>4</i>
<i>Il folle volo di Ulisse .....</i>	<i>10</i>
<i>I sette messaggeri .....</i>	<i>14</i>
<i>Autobiografia di uno spettatore .....</i>	<i>22</i>
<i>Il canto di Ulisse.....</i>	<i>26</i>



## Ai giovani d'Italia

### [Traduzione giapponese]

複数のイタリアはありえず、イタリアは統一されねばならない。異国や国内の暴君たちはイタリアを隷属の状態に、かつばらばらに引き裂かれたままにしておいたし、今もそうしておくのだ。というのも暴君たちは祖国を持っていないからだ。しかし、お前達イタリアの青年たちのなかで外国支配から解放されたイタリアを分割しようと意図したり、他の者がイタリアを分割することを血の戦いなくして受け入れる者がいたならば、その者は母親殺しの犯行者であり、この世でもあの世でも許されることはない。祖国も人の命も 1 つしかない。祖国は国民の命であるのだ。(…) イタリアを創った神はイタリアに微笑み、イタリアの国境として 2 つの崇高なものをヨーロッパに置かれた。それは永遠の力と運動の象徴であるアルプスと地中海である。地中海とアルプスの山並以外の国境を定めようとする者がいれば、その者は現在および未来のイタリア人に呪われるべきだ。アルプスの広大な囲いから始まり、イタリアを海が洗うところまで(海岸線まで)、さらには遠く離れたシチリアにいたるまで鎖状に伸びている感嘆すべき山脈は、人体の要素を構成する背骨のようにイタリアに連なっている。地中海は、山が境界になっていないところはどこでも、あたかも愛情深い抱擁でイタリアを取り囲む。この海を私たちの祖先たちは「われらの海」と呼んだ。そして王冠からこぼれおちた宝石のように、イタリアの周りにはコルシカ島、サルデーニャ島、シチリア島やその他の小さな島々が地中海に散らばっていて、そこでは土地の自然、山々の骨格、言語、生命の動きがイタリアを物語っている。この境界の中であらゆる民族が次から次へと残忍な征服者として、迫害者として行き来した。しかし、彼らにはイタリアの聖なる名前も先住民の内なる力も消す力 wasn't。あらゆる民族のなかでも最も強いイタリア的要素が征服者たちの宗教、言語、習慣をすりへらし、それらにイタリア的印をおしたのだ。この境界の中では数世紀にわたって、市民間の恐ろしい戦いが土地を血に染めてきた。小うるさい人や価値のあまりない本の書き手がそうした戦争の前にイタリア統一をユートピア(絵空事)とする考えかたを構築する一方で、人々は立ち上がり、「自分たちは兄弟だ」と叫んだ。そして一体化することを熱望し、その不用意な熱望のあまり君主へと身を委ねてしまった。というのも人々は君主が統一の生きたシンボルとなることを望んだからだ。実際には祖国の統一を否定する者は皆、神の言葉も人間の言葉も理解することができない。諸君はこの国で生き、そしてこの国で死ななければならない。というのもこの国には力と平和、諸君の使命の秘密とその使命を成し遂げる力が諸君のためにあるからだ。諸君の中で自由を求めて立ち上がる者は誰であろうとも万人のために立ち上がる人であってほしい。そしてその身のうちにアルプスから地中海まで、地中海からアルプスまでに生きる者たちすべての痛み、希望、記憶、未来への期待を取り入れてほしい。アルプスから地中海までの間にいるのは皆兄弟である。自分たちの兄弟の一人が隷属の屈辱にうめき、聖なる三色旗のもとで愛の喜びを感じ穏やかに憩うことができなかった時を忘れる者にはカインの呪いが待ち受けているし、そのような者は祖国を持つことができず、

また持つに値しない。諸君、私と共に来るのだ。今では 1300 年になるが人間が集まる場所であった広大な田園地帯が始まる場所まで私についてくるのだ。そこで諸君にイタリアの心臓が鼓動する場所を思い出させよう。そこにはゴート人、東ゴート人、エルロ人、ランゴバルド人やその他数知れぬ異民族が、ヨーロッパの様々な地域に向かって旅を再び始める前に無意識のうちになくイタリアの文明にあやかろうとして南下してきた。今土地を旅する人がその履物から落としていく塵は過去の民族が落としていったものと同じだ。広大な田園地帯は何も語らないがその広大な孤独の上には現在の旅人の魂を悲しみでいっぱい満たす沈黙が、まるで墓地に行く人にとってそうであるように広がっている。しかし不幸により純化された強い想念を胸に抱き、夕暮れの孤独に立ち止まる者は地平線の波打つようなカーブから太陽がその日最後の光線を平原の上に放った後で、次なる世代を生み、様々な民族の和解のために使われるように見えるこうした場所に再び人を住まわせるための「光あれ」という力強い言葉を待っている世代の集まりのような、生まれようとしている生命のかすかな鼓動のようなものを足下で感じる。そして私はこのざわめきを感じ、ひれ伏した。というのも私にはそれが未来への予言的な響きに思われたからだ。平原には、バッカーノがあり、それは死火山の凝灰岩からエトルリア人の遺跡まで伸びる、カエサルを暗殺した者のうちの一人の名前を思い起こさせる道沿いの、モンテロージとストルタの間の湖の近くにある。立ち止まって、地中海に従いながら目に見える限り南の方へ向かうのだ。諸君の視界の先に、広大な土地の真ん中にちょうど海に浮かぶ灯台のように、切り離された島のような、昔栄えたローマの印が見えてくるだろう。ひざまずき、そして崇めるのだ。そこにはイタリアの心臓が脈打っている。そこには永遠に続く、荘厳なローマがあるのだ。



[Vocabolario]

<b>tenere</b>	つかむ、押さえておく
<b>tuttavia</b>	しかし
<b>servo</b>	奴隸
<b>smembrare</b>	解体する、ばらばらにする
<b>patria</b>	祖国
<b>intendere</b>	理解する、～しようと意図する
<b>reo</b>	犯行者
<b>meritare</b>	～に値する
<b>perdono</b>	許し、赦免
<b>terra</b>	地球、地上
<b>né</b>	～も～もない
<b>cielo</b>	空
<b>dio</b>	神
<b>creare</b>	創る、作る
<b>sorridere</b>	微笑む、笑う
<b>sovra</b>	(=sopra) 上に
<b>assegnare</b>	あてがう、支給する、ゆだねる
<b>confine</b>	境界
<b>sublime</b>	気高い、崇高な、ひいでた
<b>pore</b>	置く
<b>simbolo</b>	シンボル、象徴
<b>eterno</b>	永遠の
<b>moto</b>	動き、運動
<b>segnare</b>	印をつける
<b>confine</b>	境界

<b>cerchia</b>	囲い、集まり、枠
<b>imnesso</b>	計り知れない、広大な
<b>simile</b>	似ている
<b>costituire</b>	～を構成する
<b>unità</b>	単一性、要素
<b>forma</b>	形
<b>umano</b>	人間
<b>scendere</b>	下がる
<b>catena</b>	鎖
<b>mirabile</b>	賞賛に値する、感嘆すべき
<b>continuo</b>	継続的な
<b>stendere</b>	伸ばす、広げる
<b>oltre</b>	さらに、～を超えて
<b>gemma</b>	宝石、芽
<b>caduto</b>	倒れた、落ちた
<b>diadema(n.m.)</b>	王冠、王位
<b>disseminare</b>	まき散らす、広める
<b>intorno</b>	～の周りに
<b>minore</b>	より小さい、より短い
<b>natura</b>	自然
<b>suolo</b>	地表、地面
<b>ossatura</b>	骨格、構造
<b>monte</b>	山
<b>palpito</b>	一打ち、感動
<b>anima</b>	魂、生命
<b>dentro</b>	中に
<b>passeggiare</b>	歩く
<b>altro</b>	他の、別の

<b>conquistare</b>	征服する、獲得する
<b>feroce</b>	残忍な、残酷な
<b>valere</b>	～に値する
<b>santo</b>	聖なる
<b>intimo</b>	ごく内部の、奥深い、 親密な
<b>energia</b>	力
<b>razza</b>	類、種族、部族
<b>popolare</b>	住みつく、住む
<b>element</b>	要素
<b>potente</b>	力強い
<b>logoro</b>	すり切れた、疲れ果 てた
<b>favela</b>	言語
<b>tendenza</b>	傾向
<b>conquistatore</b>	征服者
<b>sovrapporre</b>	重ねる、重ね合わせ る
<b>impronta</b>	印、跡
<b>tremendo</b>	恐ろしい、すさまじ い
<b>guerra</b>	戦争
<b>fraterno</b>	兄弟の、同志的な
<b>insanguinare</b>	血まみれにする、血 に染める
<b>secolo</b>	世紀
<b>palmo</b>	手のひら
<b>terra</b>	地球、土地
<b>padante</b>	規則にこだわる人
<b>scriba</b>	書き手、書記
<b>diario</b>	日記
<b>edificare</b>	建てる、築く

<b>sistema</b>	システム、体系
<b>dichiarare</b>	表明する、公言する
<b>popolo</b>	人々
<b>sorgere</b>	上がる、昇る、起き る
<b>gridare</b>	叫ぶ
<b>anelare</b>	息をきらす、熱望す る
<b>confondere</b>	ごた混ぜにする
<b>darsi</b>	没頭する、専念する
<b>foga</b>	意気込み、熱意
<b>imprudente</b>	軽率な
<b>desiderio</b>	願い、欲求
<b>sperare</b>	望む、願う
<b>vivente</b>	生きている、生存の
<b>colui</b>	～するところの人
<b>negare</b>	～を否定する
<b>segreto</b>	秘密
<b>missione</b>	使命
<b>potenza</b>	力
<b>adempiere</b>	果たす、実現する
<b>sorgere</b>	上がる、起きる、昇 る
<b>ciascuno</b>	みんな
<b>dolore</b>	痛み
<b>incarnare</b>	肉に食い込ませる
<b>speranza</b>	希望
<b>memoria</b>	記憶
<b>avvenire</b>	起こる
<b>respirare</b>	息をする
<b>alito</b>	息、呼吸
<b>maledizione</b>	呪い、不運

<b>dimentico</b>	忘れている、覚えていない
<b>gemere</b>	うめく、うなる、嘆く
<b>servitù</b>	奴隷、屈従
<b>posare</b>	置く
<b>tranquillo</b>	穏やかな
<b>lieto</b>	うれしい、喜ばしい
<b>sacro</b>	聖なる
<b>bandiera</b>	旗
<b>seguire</b>	続ける、後を追う
<b>convegno</b>	集会、集合
<b>razza</b>	種、種族
<b>umano</b>	人間
<b>cuore</b>	心
<b>battere</b>	たたく、ぶつ
<b>là</b>	そこに、そこで
<b>scendere</b>	下がる
<b>infinito</b>	無限の、限らない
<b>barbaro</b>	異邦人、異民族
<b>quasi</b>	ほとんど、だいたい
<b>ricevere</b>	受け取る、受ける
<b>inconscio</b>	意識しない、自覚しない
<b>consacrazione</b>	正式な認定、神聖化
<b>civiltà</b>	文明
<b>riporsi</b>	再び始める
<b>contrade</b>	地区、地方
<b>polve</b>	塵、ほこり
<b>viandante</b>	旅する人、旅人
<b>scuotere</b>	振り落とす
<b>calzare</b>	履物、靴

<b>muto</b>	口のきけない、黙った
<b>errare</b>	さまよう
<b>animo</b>	精神、心
<b>ampio</b>	広い、広々した
<b>solitudine</b>	孤独、静寂
<b>silenzio</b>	静寂、静けさ
<b>ingombrare</b>	塞ぐ、いっぱいにする
<b>animo</b>	心、精神
<b>tristezza</b>	悲しみ、悲嘆
<b>muovere</b>	動く、移動する
<b>camposanto</b>	墓地、共同墓地
<b>nutrire</b>	養う、育てる
<b>pensiero</b>	考え、考察
<b>purificare</b>	純化する、きれいにする
<b>sventura</b>	不運、不遇
<b>arrestarsi</b>	止まる、立ち止まる
<b>ondeggante</b>	波打つ、はためく
<b>curva</b>	カーブ、曲線
<b>orizzonte</b>	地平線、水平線
<b>raggio</b>	光線、日光
<b>murmure</b>	ささやき、つぶやき
<b>indistinto</b>	見分けがつかない、ぼんやりした
<b>fermento</b>	発酵、発酵作用
<b>brulichio</b>	群れ集まること
<b>ripopolare</b>	再び人を住まわせる
<b>luogo</b>	場所
<b>parere</b>	～のように見える
<b>intendere</b>	理解する、了解する



<b>concilio</b>	公会議
<b>fremito</b>	身震い、ざわめき
<b>prostrarsi</b>	ひれ伏す
<b>suono</b>	音、音響
<b>profetico</b>	予言者の、予言的な
<b>uccisore</b>	殺人者、暗殺者
<b>tufo</b>	凝灰岩
<b>vulcano</b>	火山
<b>reliquia</b>	遺跡、遺物
<b>presso</b>	近くに
<b>sostare</b>	とどまる、足を止める
<b>spengere</b>	押す、押し動かす
<b>sguardo</b>	視線、まなざし
<b>piegare</b>	折る、折り曲げる
<b>mediterraneo</b>	地中海
<b>soregere</b>	上がる、昇る
<b>davanti</b>	前に、前方に
<b>faro</b>	灯台
<b>oceano</b>	海
<b>isolato</b>	切り離された
<b>punto</b>	点、場所
<b>segno</b>	跡、印
<b>ginocchio</b>	ひざ
<b>adorare</b>	崇める、崇拝する
<b>solenne</b>	荘厳な、厳粛な



## Il folle volo di Ulisse

---

[Traduzione giapponese]

古代の炎の大きい方の火先が  
呻き声を洩らしつつ身をゆすりはじめた  
ちょうど風に煽られて揺らぐ炎のようだった。  
そして炎の先端をあちらこちらへやりながら  
まるでなにかを物語る舌のように  
外に声を発していった、「私がキルケのもとを  
離れた時だった。彼女は一年以上も私を  
ガエタの近くに引きとどめた  
まだアエネーアスがそう名付ける前のことだった。  
可愛い息子も、年老いた父を思う情も、  
妻ペネロペを幸福にしてやる  
夫としての務めも情けも、  
この私のうちにある激情には克てなかった。  
この世界を知り尽くしたい、  
人の悪も人の価値も知りたいという気持ちには。  
だから私は深い大海原へ乗り出した、  
一介の舟と、私を見捨てなかった  
数少ない仲間とともに。  
地中海の北岸も南岸も見た、  
スペインもモロッコもサルデーニャの島も、  
そのほかの海にひたる幾多の周囲の島も。  
私も仲間も年老いて船足は遅々としていたが、  
狭いジブラルタルの口に来た。  
ここへヘラクレスが柱を建てたのは、  
人間はこれ以上足を踏み入れてはならぬと示すためだという。  
右手にはセビリアが遠ざかる。  
左手にはもうセウタが見えなくなった。  
「同志たちよ」と私は言った、「幾多の危険を冒し  
諸君は世界の果てにたどり着いた。  
もはや余命の長くはない諸君が  
その短い夕暮れの一刻を惜しむあまりに、

日の当たらぬ人なき世界を探ろうとする  
この体験に参加を拒みはしまいと信ずる。  
諸君は諸君の生まれを考えよ。  
諸君は獣のごとき生を送るべく生を享けたのではない。  
諸君は知識を求め徳に従うべく生まれたのである。」  
私の仲間たちを私はこの短い演説で  
激しく励ましたから、先へ先へとはやりたつ彼らを  
抑えるのかえって手間どったほどだった。  
そして船尾を日出ずる方へと向けると、  
櫂をこの狂気の疾走の翼として、  
常に左手へ左手へと南下した。  
夜になればもう南半球の星々が次々と見えだした。  
我々の半球(北半球)はどんどん低くなり  
海面の下からのぼることがない。  
我々が陰しい道のりへ乗り出してから、  
月は五たび満ち、  
また五たび欠けた。  
その時はるか彼方に暗くぼんやりと山が一つ  
現れた。かつて見たこともないほど  
高い山のように思われた。  
私たちは歓喜したが、歓びはたちまち嘆きに転じた。  
この未知の土地から竜巻が捲き起こり、  
船首の一角に衝き当たると、  
三たび船体を周囲の水とともに廻らし、  
四たび廻らすに及んで船尾を高く持ち上げるや、  
船首から、神の御意のままに、船を沈めた。  
やがて私たちの上には海がまたもと通り海面を閉ざした。

[Vocabolario]

<b>maggiore</b>	より大きい
<b>corno</b>	角
<b>fiamma</b>	炎、火炎
<b>antico</b>	古い、古代の
<b>crollarsi</b>	揺れ動く
<b>mormorare</b>	さらさら音を立てる、ざわめく、ささやく
<b>puro</b>	純粋な
<b>vento</b>	風
<b>indi</b>	その後、それから
<b>cima</b>	頂点、トップ
<b>qua</b>	ここ
<b>menare</b>	連れて行く、過ごす、導く
<b>gettare</b>	投げる
<b>voce</b>	声
<b>dipartirsi</b>	旅立つ、出発する
<b>sottrarre</b>	取り去る、持ち去る
<b>presso</b>	近くに
<b>dolcezza</b>	甘さ、穏やかさ
<b>figlio</b>	息子
<b>pietà</b>	哀れみ
<b>debito</b>	正当な、相当の
<b>amore</b>	愛
<b>lieto</b>	嬉しい
<b>ardore</b>	猛暑、激しさ、熱情
<b>picciolo</b>	小さい、貧しい

<b>lasciarsi</b>	別れる
<b>giunto</b>	<giungere 着く
<b>senso</b>	感覚
<b>rimanente</b>	残っている、残余の
<b>nagare</b>	否定する
<b>seguire</b>	ついていく
<b>ritenere</b>	考える
<b>lato</b>	側、側面
<b>apparire</b>	～のように見える
<b>parere</b>	～のように見える
<b>percuotere</b>	打つ、殴る
<b>legno</b>	木
<b>lavare</b>	上げる
<b>poppa</b>	船尾
<b>prora</b>	船首
<b>giù</b>	下に、下で
<b>lito</b>	岸
<b>infin</b>	とうとう、ついに、しまいに
<b>intorno</b>	周りに、辺りに
<b>bagnare</b>	ぬらす、浸す
<b>foce</b>	河口、海峡の入り口
<b>stretto</b>	狭い、窮屈な
<b>segnare</b>	印をつける
<b>riguardo</b>	配慮、尊敬
<b>destra</b>	右
<b>pereglio</b>	危険
<b>giungere</b>	着く、達する

<b>occidente</b>	西
<b>retro</b>	後ろに
<b>sole</b>	太陽
<b>mondo</b>	世界
<b>gente</b>	人々
<b>semenza</b>	種、根源
<b>bruto</b>	獣
<b>virtù</b>	徳
<b>conoscenza</b>	知識
<b>acuto</b>	鋭い
<b>cammino</b>	歩行、旅
<b>ritenere</b>	考える、引き止める、 抑える
<b>volgere</b>	向ける
<b>mattino</b>	朝
<b>volo</b>	飛行
<b>ali</b>	(接頭)「翼」の意
<b>folle</b>	狂人
<b>marina</b>	海
<b>suolo</b>	地表、水面、表面
<b>riaccendere</b>	再び火をつける
<b>cassare</b>	線で消す、削り取る
<b>lume</b>	灯、光
<b>luna</b>	月
<b>apparire</b>	現れる、見える
<b>bruno</b>	暗褐色の

<b>lato</b>	側
<b>mancino</b>	左の、左利きの
<b>stella</b>	星
<b>polo</b>	極、極地
<b>bruno</b>	暗褐色の
<b>allegrarsi</b>	喜ぶ
<b>tosto</b>	すぐさま
<b>pianto</b>	涙、泣くこと
<b>terra</b>	地面、土地
<b>turbine</b>	旋風
<b>percuotere</b>	打つ、殴る
<b>canto</b>	角、側
<b>levare</b>	上げる、持ち上げる
<b>prora</b>	船首
<b>ire</b>	行く
<b>richiudere</b>	再び閉じる



## *I sette messaggeri*

### [Traduzione giapponese]

父の王国を探索しに旅立ち、日に日に街から遠ざかると、私に届く知らせはますます少なくなっていく。30 歳を少しすぎた頃にその旅を始め、8 年余り、正確に言えば 8 年と 6 ヶ月 15 日の絶え間ない道のりが過ぎた。私は出発の際には、数週間もしないうちに王国の果てにたどり着くと信じていたが、ずっと新しい人々や村に出会い続けていた。行く先々どこでも同じ言葉を話し、私の臣下だと述べるものばかりであった。私は、私の地理学者のコンパスは狂っていて、南の方へずっと進んでいると思っけていても、私たちは実際には、首都との距離を全く稼ぐことなく同じところをぐるぐる回っていたのではないかと時折思う。このことは、私たちが未だ国境にたどり着いていないことを説明できるだろう。しかし、この国境など存在せず、王国は限りなく広がり、たとえ私が進んだとしても決して終点にはたどり着けないのかもしれないという疑念が私をますます頻繁に苛む。もう 30 歳を過ぎた頃に、私が旅に身を置いたのは遅すぎたのかもしれない。友人や同族の人たちは、壮年期を無駄に使うことだと言って私の計画をあざ笑った。実際私の忠臣のほとんどは出発に同意しなかった。のんき者だったにもかかわらず-今よりもずっとそうだった!-私は旅の間親しい人と連絡し合えるかが心配で、護衛の騎兵の中から 7 人よい者を選んだ。彼らは使者として私に仕えた。私は無意識に、7 人を連れて行くことは大げさであると思っけていた。時間が経つにつれて、反対にそれは馬鹿げているほど少ないと言うことに私は気づいた。彼らのうちの誰も病気にならず、盗賊にも出くわさず、馬を乗りつぶすこともなかったと言うのに。7 人全員一途に、決して報われることがないと言う献身をもって私に仕えてきたのだった。彼らを簡単に区別するため、私はアルファベット順のイニシャルに従って名前を付けた。アレッサンドロ、バルトロメオ、カーイオ、ドメニコ、エツトレ、フェデリコ、グレゴリオ。家から離れていることに慣れず、私は 1 人目、すなわちアレッサンドロを旅の二日目の夕方、すでに 80 リーグ進んだ頃から送り出した。次の晩、連絡が続いていることを確かめるため、2 人目を送り、次は 3 人目、次は 4 人目と、相次いでグレゴリオの出発する 8 日目の晩まで送り続けた。1 人目はまだ戻ってきていなかった。彼は 10 日目の晩、無人の谷でその夜の宿営地を準備しているときに私たちのところに着いた。アレッサンドロの話から彼の進む速度は私の予想よりも遅いと知った。一番の駿馬に乗って一人で進んだなら、同じ時間でわれわれが進む距離の 2 倍分の距離を進めると思っけていた。ところが 1.5 倍分の距離を進むことができただけだったのだ。一日に私たちが 40 リーグ進む間に、彼は 60 リーグを一気に進んでいたが、それ以上ではなかった。他の使者もそうであった。バルトロメオは旅の 3 日目に街に向かって出発し、15 日目に私たちのところに着いた。カーイオは、4 日目に出発し、20 日目の晩になって初めて戻ってきた。すぐに私は

使者が戻ってくるのがいつか知るためには、それまでかかった日数に 5 をかけるとよいことに気づいた。首都からますます離れると、使者たちの行程は毎回より長くなっていった。行程 50 日目の後、使者の到着と到着の間隔が著しく広がり始めた。使者がはじめてのうちは 5 日毎にキャンプに着くのを見るうちに、その間隔は 25 日になっていた。わが街の声はそうしてますますかすかになっていった。何の知らせもない日々が何週間もずっと続いた。6 ヶ月が過ぎ去った後-もうファザーニ山脈を越えていた-、使者の到着と到着の間隔は 4 ヶ月に増していた。彼らは私に今ではもう遠くの知らせをもってきた。運んできた者によって袋はしわくちやで届き、野宿で過ごした夜のためにぬれたシミが時折あった。私たちはまた進んだ。むなしくも私は、私の上を流れ行く雲が子供時代のそれと同じで、遠くの町の空は、私を見下ろす青い天蓋と異ならず、空気も同じで、風のそよぎも同様に、鳥たちの声も同一のものであると自分に言い聞かせようと努力した。雲も空も空気も風も鳥も、実のところ私には新しく別のものに思っていた。私は自分が異邦人のように感じていた。進め、進め! 平原で出会った放浪者たちは私に、国境は遠くはないと言った。私は男たちを休まないよう励まし、彼らの口から出る弱音を止めさせた。私の出発からもう 4 年が過ぎた。なんと長い苦労か。首都も、家も、父も、信じられないほど不思議に遠かった。沈黙と孤独の 20 ヶ月の時が、次の使者が現れるまでの間に流れた。長い歳月によって黄ばんだ奇妙な手紙が届いた。その中には、忘れてしまった名前や私へのただならぬ言い方、私の理解することのできなかつた感情が記されていた。休息の一晩の後の、次の朝、私たちが道のりに戻ろうとしている間に、使者は反対方向へと私がずっと前から準備していた手紙を街へ運んで出発した。しかし 8 年半が過ぎた。その晩私が 1 人でテントの中で夕食をとっていると、ドメニコが入ってきた。彼は難儀な旅のせいで、よれよれになり、心は穏やかではなかったがまだ笑うことができていた。だいたい 7 年前から私は彼と会っていなかった。この非常に長い期間彼は、誰が知ろうか、何度も馬を変えながら、今まで私が開けようとも思っていなかった封筒の束を私に届けるため、草原と森と砂漠を走り抜けることしかなかった。彼はもう眠ってしまっていて、明日にも夜明けとともに再び旅立つだろう。それは最後の出発となるだろう。メモ帳の上で私は計算した。もし全てがうまくいって、つまり私が今まで通り旅路を続け、彼が彼の旅路を続けたなら、私は 34 年後になってやっとドメニコと再会することができよう。そのとき私は 72 歳になっているはずである。しかし私は疲れを感じ始めており、おそらくその前に死が私をとらえるだろう。そうして私はもう彼と再会することが決してできないのだ。34 年後(いやむしろそれより前、ずっと前)、ドメニコは不意に私の一行の灯火を見つけ、一体全体どうしてこの間に私がこれほど少しの行程しか進んでいないのか自問するだろう。今晚のように、既に忘れ去られた時代のつまらない知らせが詰まった、年月で黄ばんだ手紙を携えて、良き使者は私のテントに入ってくる。

しかし彼は入り口にとどまって、そしてわら布団に横たわり動かず、松明を持った二人の兵士を脇において、死んでいる私を見るのである。それでもゆけ、ドメニコよ。それでも私が残酷だとは言わないでくれ!私の最後の挨拶を私が生まれた街に届けるのだ。お前は、かつては私のものでもあった世界との残された絆なのだ。一番最近の使者は私に次のように知らせた。いろいろなものが変わり、父は死に、王位は兄に移され、私は失踪したものとされ、いつもその下に遊びにいていたオークの木がかつてあった場所には石造りの高い邸宅が建てられたと。しかしそれでも相変わらずそれは私の古い故郷であったと。お前は彼らとの最後のつながりなのだ、ドメニコよ。神が望まれるのならば、1年と8ヶ月のうちに私のところに着くであろう5番目の使者エットレは、もう再び出発することはできない。なぜならもはや帰るのに間に合わないからである。ああ、ドメニコ、君の後には沈黙が訪れるだろう、ついに私が待ち望んだ国境を見つけない限りは。しかし進めば進むほど、国境は存在しないのだということをますます確信するのだ。思うに、少なくとも私たちの思っているような意味では国境などは存在しないのだ。分割する城壁も、隔てる峡谷も、歩みを閉ざす山々もありはしない。おそらく私は気づきもしないで国境を越え、進み続けるのだろう。だから、私はエットレや彼の後の使者たちが、彼らが再び私のところに着いたときに、もはや首都への道へ戻らず、先にある私を待ち受けているものを知ることができるよう、私に先立って前に進むようにするつもりだ。少し前から、夕方になると言いようもない不安が私の中に灯る。もはやそれは旅をはじめた頃に生じたような、捨て去られた喜びに対する嘆きの気持ちではない。むしろそれは、私の向かう見知らぬ土地を知ることへの焦りなのだ。私はだんだん分かってきた-今まで誰にも打ち明けなかったのだが-日に日に、ありそうもないゴールに向かうにつれて、夢の中ですら見たことのないようなただならぬ光が空で光ることが。私たちが横切る草や山や川が我が国のものとは違う本質からつくられたもののように見え、空気はなんと表現したらいいか分からないような予兆を運んでくるということが。また新たな希望が明日の朝私を前進させ、夜の陰がつつみかくしているよく分からないあの山の方へ向かわせるだろう。私の役にたたないメッセージを遠くはなれた首都へ運ぶためにドメニコが反対方向から地平線に消える一方、私はもう一度野営をたたんだ。



[Vocabolario]

<b>allontanarsi</b>	離れる、遠くへ行く
<b>di giorno in giorno</b>	日ごとに、日増しに
<b>notizia</b>	知らせ、ニュース
<b>giungere</b>	着く
<b>trentenne</b>	30 歳の、30 歳の人
<b>ininterrotto</b>	とぎれない、中断しない
<b>cammino</b>	歩行、旅
<b>raggiungere</b>	届く
<b>confine</b>	国境、境界
<b>regno</b>	王国
<b>gente</b>	人々
<b>suddino</b>	臣下、臣民
<b>talora</b>	時々
<b>bussola</b>	羅針盤、コンパス
<b>geografo</b>	地理学者
<b>impazzire</b>	気が狂う、没頭する
<b>procedere</b>	進む
<b>verso</b>	～に向かって
<b>meridione</b>	南
<b>realità</b>	真実
<b>forse</b>	たぶん
<b>aumentare</b>	増やす
<b>distanza</b>	距離
<b>separare</b>	分ける、切り離す
<b>estremo</b>	末端の、極度の
<b>frontiera</b>	国境、境界
<b>sovente</b>	しばしば

<b>tormentare</b>	悩ませる、苦しめる
<b>deridere</b>	嘲笑する、あざ笑う
<b>comunicare</b>	意思疎通する
<b>inutile</b>	役に立たない
<b>dispendio</b>	出費、浪費
<b>acconsentire</b>	同意する
<b>sebbene</b>	～ではあるが、～にも関わらず
<b>spensierato</b>	無頓着な、無邪気な
<b>caro</b>	愛する人、両親、家族
<b>cavaliere</b>	騎手、騎兵
<b>scorta</b>	付き添い、護衛
<b>scegliere</b>	選ぶ、選択する
<b>servire</b>	～に仕える
<b>inconsapevole</b>	無意識の
<b>addirittura</b>	さえも、すら
<b>esagerazione</b>	誇張、大げさな振る舞い
<b>contrario</b>	反対
<b>ridicolmente</b>	こっけいに、ばかばかしく
<b>cadere</b>	転ぶ、倒れる
<b>malato</b>	病気の
<b>incappare</b>	～に出くわす
<b>brigante</b>	山賊、追いはぎ
<b>sfiancare</b>	脇腹にぶつかって穴を開ける、へとへとにさせる

<b>cavalcatura</b>	乗馬
<b>tenacia</b>	根強さ、頑固さ
<b>devozione</b>	信心、信仰、献身、 忠実
<b>ricompensare</b>	報酬を与える、報い る
<b>distinguere</b>	見分ける、区別する
<b>iniziale</b>	頭文字、イニシアル
<b>alfabeticamente</b>	アルファベット順に
<b>progressive</b>	前進的な、進歩的な
<b>percorso</b>	通過、走行、コース
<b>lega</b>	リーグ
<b>assicurarsi</b>	確認する、自信を持 つ
<b>continuità</b>	連続性、継続
<b>comunicazione</b>	伝達、通信
<b>inviare</b>	送る、遣わす
<b>consecutivamente</b>	引き続き、次々と
<b>disporre</b>	配置する、配列する
<b>campo</b>	キャンプ
<b>disabitato</b>	人の住んでいない、 無人の
<b>previsto</b>	予想
<b>destriero</b>	駿馬、血統のよい馬
<b>percorrere</b>	通る、進む
<b>medesimo</b>	同じ、同一の
<b>divorare</b>	むさぼり食う、がつ がつ食べる、どんど ん進む
<b>constatare</b>	確かめる、証明する

<b>bastare</b>	十分である、足りる
<b>moltiplicare</b>	増加させる、かけ算 をする
<b>impiegare</b>	使う、用いる
<b>riprendere</b>	再び取る、取り戻す
<b>allontanarsi</b>	遠ざかる、離れる
<b>itinerario</b>	行程、ルート
<b>intervallo</b>	距離、間隔
<b>spaziare</b>	のびのび動き回る、 広がる
<b>fioco</b>	かすかな、ほのかな
<b>tale</b>	こうした、そのよう な
<b>trascorere</b>	過ぎる、経過する
<b>varcare</b>	越える、渡る
<b>aumentare</b>	増す、増やす
<b>recare</b>	運ぶ、持ってくる
<b>ormai</b>	今となっては、もは や
<b>busta</b>	封筒、袋
<b>gualcire</b>	しわくちゃにする
<b>talora</b>	時々
<b>macchia</b>	染み、よごれ
<b>umido</b>	湿気、湿潤
<b>addiaccio</b>	囲い、野営
<b>varcare</b>	越える、渡る
<b>procedere</b>	進む
<b>invano</b>	無駄に、無益に
<b>nuvola</b>	雲

<b>sopra</b>	～の上に
<b>uguale</b>	等しい
<b>fanciullezza</b>	少年時代、初期
<b>cielo</b>	空
<b>cupola</b>	丸屋根
<b>sovrastare</b>	上にある、そびえ立つ
<b>aria</b>	空気
<b>soffio</b>	吹くこと、そよぎ
<b>vento</b>	風
<b>identico</b>	同一の
<b>ucello</b>	鳥
<b>apparire</b>	～のように見える
<b>avanti</b>	前に
<b>vagabondo</b>	浮浪者
<b>pianura</b>	草原、平野
<b>incitare</b>	刺激する、励ます
<b>spegnere</b>	消す
<b>accento</b>	アクセント、言葉
<b>scoraggiare</b>	やる気を失わせる、 落胆する、抑制する
<b>labbro</b>	口、唇
<b>fatica</b>	疲れた
<b>stranamente</b>	おかしいことに、妙なことに
<b>remote</b>	遠い
<b>quasi</b>	ほとんど
<b>silenzio</b>	静けさ
<b>solitudine</b>	孤独、静寂

<b>intercorrere</b>	中間にある、中間に置かれる
<b>successivo</b>	続きの、次の
<b>comparsa</b>	出現、登場
<b>partarsi</b>	出かける、行く
<b>curioso</b>	好奇心を持った、奇妙な
<b>ingiallire</b>	黄色にする
<b>insolito</b>	いつもと違う、ただならぬ
<b>sentiment</b>	感情、思いやり
<b>riposo</b>	休息
<b>rimettere</b>	戻す、置き直す
<b>messo</b>	使者、使節
<b>direzione</b>	方向
<b>opposto</b>	向かい側の、逆の
<b>recare</b>	運ぶ、持ってくる
<b>parecchio</b>	かなり多くの、相当な
<b>apprestare</b>	準備をする、支度をする
<b>trascorrere</b>	費やす
<b>tenda</b>	テント
<b>sorridere</b>	笑う
<b>correre</b>	走る
<b>attraverso</b>	～通って
<b>prateria</b>	草原、牧草
<b>bosco</b>	木
<b>deserto</b>	砂漠

<b>chissà</b>	誰が知ろうか
<b>cavalcatura</b>	乗馬
<b>pacco</b>	包み
<b>alba</b>	夜明け、日の出
<b>taccuino</b>	手帳、メモ
<b>calcolare</b>	計算する、算出する
<b>sentirsi</b>	～の気分になる、感じる
<b>morte</b>	死んだ
<b>cogliere</b>	つかむ、摘む
<b>anzi</b>	一方で
<b>scorgere</b>	見分ける、気づく
<b>inaspettamente</b>	思いがけず、不意に
<b>fuoco</b>	火
<b>accampamento</b>	キャンプ、野営
<b>domandare</b>	尋ねる
<b>nel frattempo</b>	その間に、そうこうするうちに
<b>carico</b>	積んだ、積み込んだ
<b>assurdo</b>	理屈に合わない、不合理的な
<b>seppellire</b>	埋葬する、隠す、忘れる
<b>fermare</b>	止まる
<b>soglia</b>	敷居、入り口
<b>immobile</b>	不動の、動かない
<b>disteso</b>	伸ばした、広げた
<b>giaciglio</b>	寝わら、わらぶとん
<b>soldato</b>	兵士

<b>fianco</b>	脇腹
<b>torcia</b>	たいまつ、ろうそく
<b>eppure</b>	だが、しかし
<b>và</b>	なんと
<b>crudele</b>	残酷な、むごい
<b>ultimo</b>	最後の
<b>saluto</b>	あいさつ
<b>superstite</b>	生き残りの、残存の
<b>legame</b>	結ぶもの、ひも、つながり
<b>recente</b>	最近の
<b>messaggio</b>	メッセージ
<b>corona</b>	王冠
<b>perduto</b>	亡くなった、失った
<b>costruire</b>	建てる
<b>palazzo</b>	館、邸宅
<b>pietra</b>	石、石材
<b>quercia</b>	オークの木
<b>sospirato</b>	待望の、のどから手が出そうな
<b>sospettare</b>	疑う、怪しむ、想像する
<b>abituare</b>	慣らす、習慣づける
<b>muraglia</b>	城壁、防壁
<b>separazione</b>	分離、別れ
<b>divisorio</b>	分ける、隔てる
<b>accorgersi</b>	認める、気づく
<b>neppure</b>	～さえもない、～すらない

<b>innanzi</b>	前に、先に
<b>antecedenza</b>	先だっていること、 先行
<b>attendere</b>	待つ
<b>ansia</b>	心配、不安
<b>inconsueto</b>	普通でない、尋常で はない
<b>rimpianto</b>	惜しむべき、哀惜さ れる
<b>gioia</b>	喜び、歓喜
<b>accadere</b>	起こる、生じる
<b>piuttosto</b>	むしろ、どちらかと 言う
<b>impazienza</b>	短気、焦燥、はやる 気持ち
<b>ignoto</b>	知られていない、未 知の
<b>dirigersi</b>	～の方へ行く、進む
<b>notare</b>	気づく、注目する
<b>confidare</b>	打ち明ける
<b>meta</b>	目的地、ゴール
<b>irraggiare</b>	光を発散する、照射 する
<b>luce</b>	光
<b>insolito</b>	いつもと違う、ただ ならぬ
<b>apparso</b>	<apparire 現れた
<b>sogno</b>	夢
<b>pianta</b>	植物、地図
<b>fiume</b>	川

<b>attraversare</b>	横切る、通過する
<b>nostrano</b>	わが国の、自国の
<b>recare</b>	運ぶ
<b>presage</b>	予言する、予知する
<b>speranza</b>	希望、期待
<b>ombra</b>	日陰、影
<b>occultare</b>	隠す、包み隠す
<b>levare</b>	上げる、持ち上げる
<b>scompare</b>	姿を消す、消える



## Autobiografia di uno spettatore

### [Traduzione giapponese]

ほとんど毎日のように、ひょっとすると日に二度までも、映画館へ行っていた数年間があった。それは、1936 年と戦争の間の数年間、つまり私の青春時代であった。その数年間は、映画が私にとっての世界であった。(現実には)私を取り巻いていたのは、それとは別の世界であったが、私にとっては、スクリーン上で目にしたものだけが、世界の特質・完全さ・必然性・均質性を持っていた。一方、スクリーンの外では、偶然一緒に置かれたような異質な要素や、あらゆる形式を欠いたように見える私の人生の素材が積み上がっていた。こっそりと、或は友達の誰かの所で勉強するという口実を持って家を出て、午後に映画館へ行ったものだった。というのも、学期中、両親は私に対して僅かばかりの自由しか許してくれなかったためだ。(映画への)真の情熱の証拠は、2 時に開いたばかりの映画館の中に入り込もうという衝動であった。最初の上演に立ち会うことには、様々な利点があった。前の背凭れに足を伸ばした状態で、3 列目の座席の真ん中に寝そべることが出来た--すべてが私のためにあるかのようにだった--殆ど空っぽのホール。後に新しい外出の許可(そして場合によっては別の映画を見る)を得るために、私が抜け出したことに(親が)気付かないような帰宅出来るかも知れない、という希望。残りの午後の勉強には有害だが、空想には好都合な軽い酩酊状態。そして、公言することが憚れるような様々な理由、これら全ての理由の他に、よりまじめな理由が 1 つあった。開館の時間に入ることで、映画を冒頭から見るという貴重な幸せが、私に保障されたのだ。それは、開場時間に入ることが、午後の半ばや終わりに行くと大抵の場合そうなるように上映時間の真ん中や終わりといった別のタイミングから見始めるのではなくて、上映時間の初めから映画を見るという稀な、幸運な体験を私に保証する、ということだった。いま、特にあるひとつの映画館について考えている。町で一番古いその映画館は、私の記憶においては無声映画の初期の時代と結び付けられている。その時期、メダルで飾られたリバティ様式の看板がかけられ、それはつい最近まで保存されていた。そして、客席の構造は傾斜のついた長い部屋で、列柱のある廊下が脇にあった。映写室の小窓は目抜き通りに面しており、その小窓から、当時の不完全な技術のために金属的に歪んでしまった、映画の奇怪な音声が聞こえてきた。そして、過去の言語とも未来のそれとも結び付かないような吹き替えのイタリア語の調子によって、その奇怪さは一層増していた。しかし、その偽りの音声は、感染しやすい力が自身の内に含まれており、セイレーン達の歌のようであった。そして、私はこの小窓の下を通る度に、(私にとっては)世界であった別世界からの呼びかけを聞いたものだった。部屋の横についているドアは、路地に面していた。休憩時間にはフロッグのついた制服を着た案内係の人が、赤いビロードのカーテンを開け、入り口から花の香りを含んだ空気の色彩が、程よく流れ込ん

できた。通行人と座っている観客は、お互いにとって間の悪い割り込みのために、僅かばかりの不快感を持って相互に見合った。特に、前半と後半との間の休憩(何故か、今日に至るまで在り続けている、イタリアだけにある奇習の 1 つ)は、あの町に、あの日に、あの時間にいたのだったということをいつも思い出させた。そのときの気分次第で、中国の海やサンフランシスコの地震などの場面に一瞬のうちに自分を再び投影できると分かったときは満足感が増大したし、(気分があまり乗っていないときは) 或は、いつもここにいたのだということを忘れるな、没入するなという呼び声が私の心に取り付いていた。当時は、より主要な市民映画館へ行くにつれて、中断もより唐突で無いようになっていった。そういった場所では、金属の丸天井が開くとともに、空気が入れ替わっていた。その丸天井の中央には、ケンタウロスやニンフが描かれていた。空の景色は、映画の途中に瞑想に耽る時間を差し挟んだ。何世紀も前、他の大陸からやって来た可能性を持っていた雲が、ゆっくり流れていくのと同時に。夏の夕方時には、上映中も丸天井は開いたままだった。大空の存在が、遠くかけ離れたところにある全てのものを 1 つの世界にまとめ上げていた。夏休みには、私はより静かで自由な映画館によく通った。夏になると、私の級友の多くは、海沿いにある私達の町を出て、山や田舎へ向けて去っていった。私はというと、仲間も無しに、何週間も町に残っていた。毎年夏には、私のために、古い映画を漁るシーズンが開かれた。というのも、昔の映画、この雑食的渴望が私を満たす以前の映画が、再びプログラムに組み入れられたのだ。そして、それらの日々には、失われた時を求めること、その時の自分にはまだ無かった長年の映画ファン歴を築くことが出来たのであった。通常の配給システムを通じて公開されている映画。今私が主題としているのは、そうしたタイプの映画だけである(シネクラブの回顧的宇宙やフィルムセンターにおさめされている神聖な歴史を調べることで、私の人生にこれまでとは異なる位相を印付けるだろう。それは、様々な町や世界との関係である。そして、映画はより複雑な文脈や歴史の一部になるだろう)。しかし、他方では、私はある感情を持っている。(その感情とは)グレタ・ガルボの映画を見直したというものだった。それはおそらく、34 年前のものだったろうが、私にとっては先史時代に属していた。それには、若く、口髭の無いクラーク・ゲイブルが出ていた。“娼婦”と呼ばれていたか—或は別の名前だったか?—その一続きの夏に、グレタ・ガルボの 2 本の映画が、私のリヴァイヴァルコレクションに加えられた。とにもかくにも、私が気に入った映画はジーン・ハーロウの“平手打ち”であった。

[Vocabolario]\*この文章だけは単語リストの出来が非常に悪いです。あしからず。

<b>dare su</b>	～に面する	<b>falsità</b>	偽り、うそ
<b>volta</b>	回数	<b>comunicativo</b>	伝わりやすい、伝染しやすい
<b>guerra</b>	戦争	<b>laterale</b>	横の、側面の
<b>insomma</b>	つまり	<b>vicolo</b>	路地、小路
<b>epoca</b>	時代	<b>velluto</b>	ビロード
<b>schermo</b>	スクリーン	<b>aria</b>	空気
<b>necessita</b>	必然性	<b>affacciare</b>	見せる
<b>coerenza</b>	均質性	<b>soglia</b>	敷居、戸口
<b>ammunchiare</b>	積み上げる	<b>passante</b>	通行人
<b>per caso</b>	たまたま	<b>spettatore</b>	観客、聴衆
<b>materiale</b>	素材	<b>disagio</b>	居心地の悪さ、不自由
<b>privo</b>	～が欠けている	<b>intrusione</b>	割り込み、侵入
<b>sdraiarsi</b>	体を伸ばして	<b>sconveniente</b>	不適當な、不都合な
<b>rincasare</b>	帰宅する	<b>specie</b>	種
<b>legato</b>	結びつけられた、つながれた	<b>strano</b>	奇妙な
<b>ricordo</b>	思い出、記憶	<b>usanza</b>	しきたり、慣習
<b>conservare</b>	保存する、保護する	<b>umore</b>	ユーモア、滑稽、気分
<b>insegna</b>	記章、バッジ	<b>crescere</b>	育つ
<b>decorare</b>	装飾する	<b>soddisfazione</b>	実現、遂行、喜び
<b>struttura</b>	構造	<b>istante</b>	すぐの、即座の
<b>sala</b>	ホール	<b>terremoto</b>	地震
<b>fiancheggiare</b>	横に沿って並ぶ	<b>piombare</b>	急に落ちる、真っ逆さまに落ちる
<b>cabina</b>	キャビン	<b>addosso</b>	～の上に
<b>finestra</b>	窓	<b>interruzione</b>	中断、中止
<b>deformare</b>	ゆがめる、縮図を書く		
<b>eppure</b>	だが、しかし		



<b>cittadino</b>	市民
<b>cambiamento</b>	変化、変わること
<b>avvenire</b>	起こる
<b>cupola</b>	丸屋根
<b>affrescare</b>	フレスコ画法で描く
<b>continente</b>	大陸
<b>secolo</b>	世紀
<b>firmamento</b>	大空、青空
<b>inglobare</b>	組み入れる
<b>calma</b>	無風、静けさ
<b>marittimo</b>	海の
<b>stagione</b>	季節
<b>caccia</b>	狩り、追跡
<b>impadronirsi</b>	奪い取る、獲得する
<b>ricquistare</b>	再び征服する
<b>ornavano</b>	返された
<b>programmare</b>	プログラムを立てる
<b>fame</b>	餓え
<b>onnivora</b>	雑食性の
<b>impadronirsi</b>	独占する
<b>ricquistare</b>	取り戻す
<b>perduti</b>	失われた
<b>esplorazione</b>	探索
<b>retrospettivo</b>	回顧的
<b>cineclub</b>	シネクラブ
<b>consacrato</b>	神聖な

<b>racchiuso</b>	包み込まれた
<b>segnere</b>	マークする
<b>fase</b>	位相
<b>rapport</b>	関係
<b>diversi</b>	異なる
<b>discorso</b>	文脈
<b>intanto</b>	他方で
<b>porto</b>	運ぶ
<b>emozione</b>	感情
<b>reccaperare</b>	取り戻す
<b>apparteneva</b>	属していた
<b>preistoria</b>	先史
<b>baffi</b>	口髭
<b>cortigiana</b>	娼婦
<b>aggiunsi</b>	追加された
<b>collezione</b>	コレクション
<b>stesso</b>	同じ
<b>serie</b>	シリーズ
<b>comunque</b>	とにかく



## Il canto di Ulisse

### [Traduzione giapponese]

...ウリッセの歌。どのように、そしてなぜ、それが私の心に浮かんだのかなど、誰が知ろうか。しかし、選んでいる時間は私たちにはない。この1時間はもはや1時間ではないのだ。もしジャンが聡明なら、理解するだろう。理解するだろう。私はそれだけの力が自分にあるように感じる。...ダンテとは誰か。神曲とは何か。もし神曲とは何かを手短に説明しようとするなら、いかなる新しい不思議な感慨が感じられるのか。地獄はどのような構造をしており、自分が人に加えたのと同じ刑罰を受けることとは何か。ヴィルギリオは理性であり、ベアトリーチェは神学である。

ジャンは強く注意を向け、そして私は、ゆっくり、注意深く、話しを始める。

古代の炎の大きいほうの角が  
うめきながら揺らめき始めた  
まるで風で消えかけた火のごとく  
揺れながらその先をあちらこちらへ向け  
それは言葉を話す舌であるかのように  
言葉を外へ投げかけ言う 「私が...

ここで私は止まり、翻訳しようとする。壊滅的だ。哀れなダンテ、かわいそうなフランス人よ!それでも、この体験にはうまくいくかもしれない見込みがあるようだ。ジャンはその奇抜な舌の比喩に感嘆し、《antico》を表すのにふさわしい言葉を提案する。それで《quando》の後は何もない。記憶の穴だ。「エネーアがそう名づける前に。」また穴が。役に立たないいくつかの断片が浮かんでくる。「...年老いた父への情も、ペネロペを幸せにしてやるしかるべき愛も...」それも正しいだろうか?

...しかし私は深く広い海へ乗り出した。

これは合っているはずだ。これについては自信がある。ピコロに説明することができ、なぜ《misi me》が《je me mis》ではなく、もっとずっと強く大胆で、絆を切ることであり、彼ら自身を障壁の向こうへ投げ出すということであると識別でき、私たちはこの衝動をよく知っていた。深く広い海。ピコロは海を旅したことがあり、それ(深く広い海)が言わんとすることは知っている。それは、水平線がすっかり見渡せるときのもので、その水平線は

自由で真っ直ぐで単純で、そして今や海の匂いしかしない。甘美なものは残酷なほど、遠い。私たちは発電所に到着した。そこではケーブル設置係の部隊が働いている。エンジニアのレーヴィがいるはずだ。ほら、溝の外に頭だけ見えている。彼は私に手で合図をする。彼は優秀な男だ、私にはまったく意気消沈しているのも見たこともないし、食事のことは話もしない。「広い海。」「広い海。」私はそれが、《diserto》と韻を踏んでいることを知っている。「…私を見捨てなかった、あのつましい仲間と」しかしそれが先に来るのか後に来るのかはよく覚えていない。そして旅、エルコレの柱の向こう側への無謀な旅も、なんと悲しいことか、散文で語られねばならない。冒瀆的行為だ。私は一行しか記憶していないが、そこに立ち止まってみる価値はありそうだ。

…人がそれ以上入り込まないように。

《si metta》私は、それが前と同じ表現《e misi me》であることに強制収容所に来て初めて気づいた。しかし私はジャンにそれを知らせない。それが重要な指摘であるか自信がないのだ。どんなにほかに言うべきことがあるだろう。そして太陽はすでに高く、正午は近い。私は急ぐ、大変急いでいるのだ。ほら、思慮深いピコロよ、その目と精神を開け。私は君に理解してもらう必要がある。

お前たちの起源を考えよ。

お前たちは獣のごとき生を送るべく生を享けたのではなく、  
知識を求め徳に従うべく生まれたのである。

あたかもそれは、私も始めてそれを聞いたかのようであった。トランペットの高らかな響きのようで、神の声のようでもあった。一瞬の間、私は自分が誰で自分はどこにいるのかを忘れてしまった。ピコロは私に繰り返すように頼む。ピコロはいい男だから、それが私のためになると気がついたのだ。おそらく、それはそれ以上の何かだ。おそらく、ぱっとしない翻訳と平凡でせつかな注釈にもかかわらず、彼はメッセージを受け取り、それが彼に関わっていること、苦難のうちにいるすべての人々、特に私たち、スープを運ぶ棒を肩にかけてこれらの事をあえて議論する私たち二人に関わっていることを感じたのだ。

私の仲間たちを、私はそう言って励ました…

…この《acuti》が何を言わんとするのか説明しようと頑張るが駄目だ。ここで再び欠落があ

り、今回はどうしようもない。《月の下に太陽があった。》だか、なにかそのような感じのものだ。しかし前はどうなっていたか?...全く分からない。ここ(強制収容所)で言われるように《keine Ahnung》(全然知りません)だ。ピコロよ、許してくれ、私は少なくとも4つの詩節を忘れてしまった。

--何ていうこともないよ、いいから先に進んで。

...その時ははるかかなたに褐色の山が一つ  
現れた かつて見たこともないほど  
高い山のように思われた

そうだそうだ、《alta tanto》だ、《molto alta》ではない。そして結果節が続く。そして山々、それが遠くに見える時...山々よ...ああピコロ、ピコロ、何か言ってくれ、話してくれ、私の山々のことを考えさせないでくれ。ミラノからトリノへの列車で戻るときに夕闇の中で姿を見せたあの山々!もう十分だ、先に進む必要がある。これらは思うことだが、話すことではない。ピコロは注意を払い私を見た。《non ne alcuna》を最後まで思い出してつなげることができるなら、今日のスープをあげてもいい。私は韻を用いて構成しなおそうと努力し、目を閉じ、指をかむ。しかし役に立たない、残るのは静寂だ。私の頭の中を他の詩句がぐるぐる回っている。《...la terra diede vento...》いや、これは別のだ。遅い、遅い。台所に着いてしまった。締めくくる必要がある。

三たび船体を周囲の水とともにめぐらし、  
四たびめぐらすに及んで船尾を高く持ち上げるや、  
船首から、神の御意のままに、船を沈めた...

私はピコロを引き止める。《この神の御意のままに》をピコロが聞き、理解することは、絶対に必要で緊急なのだ。遅くなりすぎる前に。明日には彼か私は死んでいるかもしれないし、二度と会うこともないかもしれない。中世のこと、これほど人間的で必要でありながら不意に時代錯誤的なもの、そしてまた別のものも、私自身がついさっき、一瞬の直観のうちに見た巨大な何か、おそらく私たちの運命の理由、私たちがここにいる理由について、口に出し、説明しなければならない...

私たちは今や、他の部隊のスープ運搬係の汚く、ぼろぼろの服をまとった群集の中ほど、スープを求める列の中にいる。新しく来たものが背後に殺到する。--キャベツとカブ?—キ

ャベツとカブ--。公式に今日のスープはキャベツとカブであることが告げられる。--キャベツ

とカブ--キャベツとカブ。

しまいには私たちの上には海がまたもとどおり海面を閉ざした。



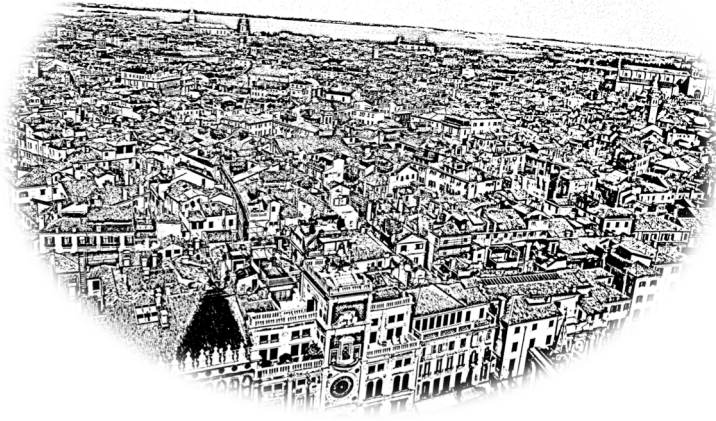
[Vocabolario]

<b>scegliere</b>	選ぶ、選び取る	<b>frammento</b>	断片
<b>sensazione</b>	感覚、感じ	<b>utilizzabile</b>	利用できる、活用できる
<b>curioso</b>	好奇心をもった	<b>esatto</b>	正確な、正しい
<b>novità</b>	新しさ、奇抜さ	<b>sicuro</b>	安全な、確かな、自信がある
<b>provare</b>	試す、～してみる	<b>audace</b>	大胆な、勇敢な
<b>distribuire</b>	配る、分配する	<b>vincolo</b>	固いきずな、拘束
<b>contrappasso</b>	自分が人に加えたのと同じ刑罰を受けること	<b>infranto</b>	割られた、破れた
<b>lento</b>	遅い、ゆっくりした	<b>scagliare</b>	投げつける、浴びせる
<b>accurate</b>	入念な、丹精こめた	<b>barriera</b>	柵、壁
<b>fermarsi</b>	止まる	<b>impulse</b>	衝撃、衝動、刺激
<b>tradurre</b>	翻訳する	<b>odore</b>	香り、におい
<b>disastroso</b>	災難をもたらす、壊滅的な	<b>ferocemente</b>	残酷に
<b>tuttavia</b>	しかしながら、それでも	<b>cenno</b>	合図、サイン
<b>esperienza</b>	経験、体験	<b>temerario</b>	向こう見ずな、無謀な、軽率な
<b>promettere</b>	約束する、見込みがある	<b>colonna</b>	柱
<b>ammirare</b>	感嘆する、ほれぼれと見とれる	<b>costretto</b>	<costringere むりに～させる、強いる
<b>bizzarro</b>	風変わりな、異常な	<b>raccontare</b>	語る、物語る、話して聞かせる
<b>suggerire</b>	暗示する、ほのめかす	<b>prosa</b>	散文
<b>termine</b>	終わり、終点	<b>salvare</b>	救う、救出する
<b>appropriato</b>	適切な、ふさわしい	<b>verso</b>	詩句、詩の一行
<b>rendere</b>	返す、返却する	<b>pena</b>	処罰、刑罰
<b>buco</b>	穴	<b>osservazione</b>	観察、考察
		<b>attento</b>	注意した、注意深い

<b>orecchio</b>	目
<b>mente</b>	頭脳、精神
<b>bisogno</b>	必要、必要性
<b>tromba</b>	トランペット
<b>pregare</b>	～に頼みこむ、～に 祈る
<b>ripetere</b>	繰り返す、繰り返して 行う
<b>nonostante</b>	～ではあるが、～に もかかわらず
<b>ragionare</b>	論じる、議論する、 考える
<b>spalla</b>	肩
<b>riguardare</b>	関わる、関連を持つ
<b>invano</b>	むだに、無益に
<b>irreparabile</b>	修復できない、償え ない
<b>comparire</b>	現れる、世に出る
<b>basta</b>	もうたくさん、もう 結構、もういい
<b>proseguire</b>	続ける、継続する
<b>attendere</b>	待つ、期待する
<b>zuppa</b>	スープ
<b>ricostruire</b>	再び建てる、再現す る
<b>moredere</b>	噛む
<b>dito</b>	指
<b>capo</b>	頭、頭脳

<b>trattenere</b>	引き留める、押さえて おく
<b>assolutamente</b>	絶対的に、どうして も、全く
<b>urgente</b>	緊急の、差し迫った
<b>comprendere</b>	含む、理解する
<b>medioevo</b>	中世
<b>inaspettato</b>	意外な、予期しない
<b>anacronismo</b>	時代錯誤の、アナク ロニズム
<b>gigantesco</b>	巨人の、巨大な、膨 大な
<b>soltanto</b>	ただ～だけ、～のみ
<b>intuizione</b>	直観、勘
<b>attimo</b>	瞬間、刹那
<b>destino</b>	運命、定め
<b>ormai</b>	今ではもう、もはや
<b>fila</b>	列、集団
<b>folla</b>	群衆、人混み
<b>sordido</b>	きたない、よごれた
<b>annunziare</b>	=annunciare 知らせ る、告げる
<b>ufficialmente</b>	公式に、正式に
<b>cavolo</b>	キャベツ





ぼくのかんがえたさいきやふのぴあつつあ  
東京大学イタリア語教材

---

2012 年 7 月 1 日      初版第一刷  
2013 年 7 月 5 日      第二版第一刷  
2015 年 9 月 25 日    第三版第一刷

編者    2011 年度入学東京大学文科Ⅲ類 6 組

発行所 財団法人 東京大学出版会

印刷所 駒場学生会館

製本所 駒場学生会館

---

c) 2012. 2011 年度入学東京大学文科Ⅲ類 6 組

